
甘党執事と紅の美女

kokusou.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘党執事と紅の美女

【Nコード】

N3965U

【作者名】

kokusou.

【あらすじ】

ドルトナンド家の執事は苦勞人だった。彼の主たちは問題行動ばかり。彼は常に事後処理に追われる身。

ある日脱走した次女を追って、たどり着いた店にて、彼はある女性と出会う。

「貴女のごとは気に食わない！」

「奇遇ね、私もよ」

『男装の令嬢』番外編です。

のんびり更新となります。

プロローグ（前書き）

『男装の令嬢』番外編となります。
よろしくお願いいたします。

『男装の令嬢』の方で主人公と相手役の絡みが只今大変薄いため、
こちらの作品は主人公絡み多め、元の主人公たちは影薄めでお送り
する予定です。

プロローグ

ある所に、とんでもなく実力派な家がありました。

家系全体にわたり、男性は勿論女性でさえも代々伝わる剣術と拳法を習得しておりまして。

その剣術と拳法に関しては、王族にさえ詳細は秘密。噂では暗殺用の拳法もあるとかないとか。

なんでも、それを習得するのは嫁入りだろうと婿入りだろうと当たり前。家系の中で必要なのは根性と努力。それが満たされなければその家系の一員としては役不足でございます。

つまり、武道に関して実力派過ぎて、貴族内でもその存在は異質な家でございます。

特徴は銀髪。そしてその身目麗しさ。身目麗しい者からは、やはり身目麗しいものが生まれる。それを体現しているような家でございませう。

その名をドルトナンドと言い、その教えの礎となったのは今の後継ぎから見て曾祖父に当たる人物。

彼は、『弱きものを守る、その力があるならば、それは惜しまずにその為振るべきである』を信条に掲げる、紳士でございました。

しかし稀に見る、女性好きでございました。

彼とその妻の争いは、屋敷を壊し、召使達を死の淵へと追いやり、拳句王族貴族でも手を煩わすような大きなもの。

一言で言うならば「戦争でございましょうか。」

喧嘩で表すには、少々無理がありましたよ。

さて、話は逸れましたが、先程申した通り、血族には血族の性格がどことなく受け継がれるものでございましょう。

さあ、彼らの子孫はいかなものか。

それはまた別の物語にて詳しく。

しかしこの物語の主人公は彼らではなく「彼らの家の三代目執事。」

彼は一言で言うなら苦勞人。

彼の仕える家の騒動に巻き込まれ、事後処理、後片付けに奔走する人物でございます。

彼には、少し秘密にしていることがございまして。

彼が美しい紅の瞳の美女と紡ぐお話の始まり始まり。

プロローグ（後書き）

『男装の令嬢』優先につき、不定期更新となることをご容赦くださいませ。

この作品と、『男装の令嬢』を読んでくださる皆様に感謝を。

お嬢様を探してお店に辿り着きました。(前書き)

スロー更新です。

とりあえず楽しんでいただけるような作品にしていきたいと思っております。

いや、まあ自分の好きなように書くのが前提なんです(汗

『男装の令嬢』より、一話がかかなり短めでお送りします。それではどうぞ。

お嬢様を探してお店に辿り着きました。

お嬢様が、また逃亡した。

ドルトナンド家三代目執事、トウーランドはその苛立ちを隠そうともせず、城下の道を進む。

彼は先程邸宅にて令嬢搜索の命を言い渡されーここにいるのだ。

執事とは普通家につきつきりなものイメージがあるが、かなりドルトナンド家では柔軟である。

・・・脱走、抗争、女問題。

数々の問題を起こすドルトナンド血族と付き合うには、それ相応の柔軟かつ俊敏な対応が求められるからだ。

特に、後片付けを任される人物は。

それが第一級の任務とも言えるかもしれない。

トウーランドは眼鏡をずらして、眉間を揉んだ。

その溜息をつく姿に、城下の乙女たちの視線が集まる。

ドルトナンドの美系集団によって忘れられがちであるが、彼の容姿も相当に整っている。

眼鏡の奥はアイアンブルーの瞳。一括りにした黒っぽい髪は所々深緑色が混じっていることを、日の下ならば窺い知れるだろう。血の関係でやや浅黒い肌をしている。

彼は黒のズボンに白のシャツといういつもの執事服とは違い、かなりラフな出で立ちだ。

そのままならナンパもされようなものであるのに、彼の不機嫌才一ラによって女性たちは彼の容姿を眺めるに留まっている。

それでも声をかけようという猛者もいるようだが、その声に不機嫌な視線で答えてしまっただけはその先はないだろう。

生憎と彼はそういうことにはかなり鈍感で、頭の中は今の不機嫌の原因の人物への怒りによって埋め尽くされていたからである。

あの人は毎回毎回っ！

ある時は、座学に疲れたと。ある時は、体が鈍ったと。ある時は、女性と接していないから力が足りないと。^{パワー}

よくわからない理由をつけては、勝手に男装して屋敷を抜け出すのだ。彼女にとっては脱走するに足る理由なのだが、男性でありながら、女性にほぼ興味がないと言っても過言ではないトウーランドには、理解しがたかった。

トウーランドは生まれた時から父の執事姿を見てきた。

その時点で祖父は引退し、彼が8歳になるころには他界した。執事職で多忙な父の傍ら、トウーランドを育ててくれたのは実質祖父だ。

父が年を取ってから生まれたトウーランドは、父に迷惑をかける事だけはしまいと幼心にも思っていたことを今でも覚えていて。そのトウーランドの考えを知っていたのか、祖父はいろいろなことを教えてくれた。

執事職から始まり、薬草のことだったり、人を動かすやり方。老体に鞭打って剣の扱い方まで。

そして彼はこの世を去る直前に、こう自分に言った。

「自分が仕えるに足ると、そう認められた人に仕えなさい」

それはドルトナンドでなくともいいのだと。

しかし彼は、25歳の時執事を継ぐ話が来た時、ドルトナンド家を選んだ。

ドルトナンド家四兄弟は、どう考えても苦勞する。自身がこの25年間、苦勞してきたことがその証明だ。

けれど、仕えるに足る人物達であると彼自身、自信を持って言えた。

・・・しかし。

「脱走は戴けませんっ・・・!!」

次女ルナディアは神出鬼没。

城下の事となれば、彼女は恐らく実家の誰よりも詳しい。どのよ
うな恰好で出歩いているのか分からない上、自分より地理で勝るル
ナディアを捕まえようと、トゥーランドの眼は血走っていた。

少しでも似たような背丈、歩き方、髪色の人間がいればその鋭い

視線を向けてしまい、怯えられる始末だ。

少し散策してやはり見つからないと判断したところで、トゥーランドは胸元のポケットから一枚の紙を取り出す。

これは、秘策。

令嬢の行動範囲を調べ、親しくしている女性を調べ、そして手に入れたのがこの地図だ。中にはルナディアのよく訪れるという店の場所が書かれているはずである。

そこまで分かっている、なぜルディの男装した姿諸々が分かっていないのか、というのは当主たちの策略ーいや、ささやかないたずらである。

トゥーランドは地図と周りの景色を見比べると、路地裏へと歩を進めた。この道を後数刻後にお探しの令嬢が駆け抜けることになるのだが、そんな事を彼が知る由もない。

雑に置かれた木の箱や、家具などは、この道に裏口を持つ店のものなのか。積み上げられたそれらのせいでやたらと道幅が狭くなっている。

トゥーランドはちつと舌打ちをした。

「片付けをしろっ！片付けを！いくら表面を繕っても、出るんです

よ。実際の自分の怠惰さはねっ！」

完璧主義からの言葉を小さく吐きながら、それでもなんとか進む。その間も悪態は吐き続ける。

途中で崩れかけた荷物をせつせと直すのは彼の性さがだろう。全てを片づけてしまいたいのを寸でのところでこらえる。

しかし間抜けにもそんなことを何度も繰り返したため、予想より遅い到着となったのはいうまでもない。

木製の扉。窓は洒落ていて、特殊なガラスを使っているのだろう。光の反射で虹色になる部分がある。通り過ぎてしまえば気付かないだろう細かい装飾が、窓枠とドアノブに施されている。

鈴は少しくたびれていて、響きは良さそうではない。

この主人はもしかや面倒くさがりなのか、とトウーランドは眉を顰めた。

一目で趣味の良さが分かるような店であるのに、どことなく、管理が行き届いていないような。

そして鈴の横に下げられたプレートに目をやる。

店の名前は――

「ブラック・キャット」

お嬢様を探してお店に辿り着きました。(後書き)

ありがとうございました！

アンティークの趣味がいいのは認めます。(前書き)

あっさりさっぱり書くことと思っております。

・・・書けているでしょうか。(苦笑)

アンティークの趣味がいいのは認めます。

からん、という音は、予想通りあまり響かなかった。錆びている。そう思ったトウーランドは盛大に眉を顰めた。

やはり手入れが行き届いていない！趣味がいいのは認めるが、お嬢様はどんな輩とあっているのか。

しばし待った後で、奥から声が響いてきた。

「……どちらさまあ？」

「失礼します」

客がみえているというのに会おうともしないのか。声からして女性だが、なんて失礼な店なのだろう。

「この時間は開店していなただけれど」

「……存じています」

ひょっこりと顔を出した女性は、奥から出てきた。厨房にいたらしい。

その証拠にエプロンをつけているし、何より、今テーブルに置いたものは。

(あ、甘い・・・香り?!)

「あの

・・・何か」

じろじろをタワーランドを見て、どうやら品定めしたらしい彼女は、首を傾げながらもタワーランドを見据えた。

「この店の名前は？」

「は？」

何を急に聞くのか。

さっき見た看板を思い出しながら、タワーランドは眉根を寄せた。

「ブラック・キャットでしょう」

彼女はびっくり、と片眉をあげる。

三角巾と、結っていた髪の毛の髪留めを外すと、豊かな黒髪が肩に流れ落ちた。

その顔には、先程にもまして苛立ちが見て取れる。じろ、とトウーランドを見た彼女は苛立ちも露にして、腰に手をあてた。

「何の用事で来たの。さつきもいったでしょお。開店してはいないんです」

「いや、あの、ある………あー男性が訪ねてこなかったか」

「そりゃ接客業してる店なんで、男は訪ねてきますけどお？」

「いや……銀髪の」

どこまでいっていいものか、とトウーランドは視線を彷徨させた。その様子に、ファルナールが今度は困惑したようだ。

「……あなた、そっち方面の客じゃないわよね？」

「はあ？」

「ふうん、うちの店の裏業を知ってるわけじゃないのね」

「何をぼそぼそと」

「なんでもないわよ」

ふんつと鼻を鳴らした彼女は、しっしっ、と、追い払うように手を払った。

「さっきも言ったけど、開店時間じゃないの。またのご利用をお待ちしていますー」

「きゃ、客に対して失礼でしょう」

ひくり、と顔がひきつる。

にやり、と彼女が笑みをつくって、わざとらしくきよろ、と周りを見回した。

「客？どこに客？ええー見えないわねえ」

「・・・っ！失礼しますっ！」

ここに来たのは間違いだった！

盛大に足音を立てて、トゥーランドは戸口へ向かった。大きく扉を開けたはいいが、はた、と錆びた鈴を思い出した。

・・・アンティークの鈴のためです。

トゥーランドは、戸口から出ると、ぎっと彼女を睨みつけー

ゆっくりと、丁寧に、最大限に鈴を案じて。

扉を閉じた。

その直後にどすどすと言わんばかりに去っていく影を見送った店主は、不意にふっと息を漏らした。

すすつと机に近づくと、ふるふるると震えだす彼女。

「ふっ、ふふふあははは！！」

堪え切れないと言わんばかりに彼女は笑いだした。

苦しそつに手を机について、腹を押えて笑う彼女など、いつぶりが。

きつとこのアンティーク達に意思があったなら、きつとそう思ったであろう。

「ふうん、ルディのところの執事、あんな人なのね」

とても彼女が面白そうな顔をしていたことは、アンティークたちしか知る由もない。

「どちらに行ってらしたんですっ」

お嬢様がやっとなられた。

その顔はどこか憂いを帯びていて。何かあったのか尋ねるべきか、と一瞬逡巡したが、結局は口を閉ざした。

彼女は言いたくないことは言わないし、自分に意見を求める時には自ら口を開くはずだ。

しかし、説教の一つ二つはせねばならないと彼は息を吸い込んだ。

途端に、小言はいい、と言わんばかりに押しつけられたのは小さな箱。

ふわり、と漂ってきた香りに、トウーランドは眉根を寄せた。

「お土産。好きじゃないかもだけど、それで許して頂戴。なかなか人気なのよ、それ」

「・・・今回だけですよ。全く」

何か、あつたのだろうか。

部屋に戻ってから、その箱を開けてみた。

「じつ、じつは・・・」

どうしようかな。

今日のことを思い出して、トウーランドは苦い顔をしたが、結局は興味に逆らえなかった。

ぱくり、と一口。

「・・・しまい」

ぼそり、と呟いたこの言葉を誰にも聞かれなかったことに、トウー
ランドはこっそり感謝した。

二度食べたい味なんです、何か。

からん。

まだ日も高いその日。

ブラックキャットの錆びた鈴が鳴った。

「.....」

「ごほんとお客らしい、人間が咳をするのを店主は黙って聞いていた。」

ちっちっちっ。

鳴るのはアンティークな時計が時を刻む音だけだ。まだその閉じられた扉から小人が顔を出すまで、三十分はある。時計からの手助けは期待できないようだ。

ちっちっちっちっ。

何も言わない店主に痺れを切らしてか、お客は目深に被った帽子の下の口を開いた。

「すまない、この店は菓子を扱っていると聞いた、のだが」

お客はもごもごと言葉を発する。

幾分がらがらしているような気がしなくもない。

その身に着けるマントはとてつもなくぼろく、かぶる帽子は一体いつのものか。

みていて、痛々しい。

しかし、除く靴と、特徴的なその眼鏡は一目で高級品とわかるもの。ファルナールは若干一いやかなり呆れを含ませて、口を開いた。

「・・・前も言ったと思うけど、昼間は開店していないのよ」

「何のことだ？以前とはいつだ」

「・・・変な小芝居止めてくれますう？」

ファルナールは、その美しい眉を寄せた。

「ドルトナンド伯爵家執事、トウーランドさん？」

「なぜ、分かったんですか」

勧められた椅子に腰を落とした彼は肩を落としていたが、直ぐに憎々しげにファルナルを睨みつけた。

彼女は呆れたように溜息をついて視線を逸らすと、肩を竦めて見せた。

「あれで気付かなかつたら、私は自分を疑うわよお」

「・・・そんなにへたでしたか、私の変装」

「ルディと比べたら月とすっぽん。提灯に釣り鐘よお」

変装というのもおこがましい、と彼女は言うので、トウーランドは更に肩を落とす羽目となった。

「っていつか、お菓子食べに来たのよねえ？」

立ったまま机に手をつけて、ずいっと彼女はトウーランドの方に身を乗り出した。たわわな胸が揺れ、ぱっくりと開いた服から谷間が覗いた。

普通なら、ここで顔を赤くするなどするのが男性であろうがー

彼はむっとしたように立ち上がると、素早く自分のベストを脱いだーあの旅人のつもりか、だいぶん草臥れたマントの下に、これだけきつちりした服と靴を身に付けているところから抜けているーそして彼女の体にさっと回すと、素早くボタンを前で留めた。

これぞ熟練の技。早業である。

「女性がそのように肌を晒してはなりません！」

きよとん、としたファルナールに、トウーランドは腰に手を当てて声高に言い放つ。

「・・・・・・・・」

しほしの無言。

「ふっふふふふふ、あっははははは！！」

彼女が急に笑い出したのでぎょっとしたのはトゥーランドだ。

「本当に・・・あなた、笑わせてくれるわ！」

「なっ、どこに笑う要素があったというんです！」

むすっとしたトゥーランドは本気でそう思っているようだが、ファルナールにしてみれば彼の行動こそ笑いの種。自分が全く想像もしない行動をしてくれるというものだ。

「・・・ふふっ。こんな真面目さんが、甘いもの好きなんてねえ。

その眼鏡といい、顔といい・・・」

とても甘いもの好きには見えないわ、と笑う彼女に、さすがに自分でも自覚しているのかトゥーランドは気まずそうに身じろぎした。むすっとした顔にまたファルナールが笑いのつばを刺激され、お

腹を押さえた。

「いつまで笑っているんですか・・・っ！」

「ふふふ、ごめんなさい」

「もういいですっ！」

彼はその顔に皺をよせて、勢いよく立ちあがった。その顔が羞恥に染まっているのは決して気のせいではないだろう。

そのままマントと帽子を引っ掴み、出口に向かおうとする彼に、ファルナールは何とか笑いをおさめて声をかけた。

「ちょっと、待ちなさい」

「なんですかっ！私は忙しいんですっ」

「忙しい中、わざわざうちの菓子、買いに来たんでしょっ？」

ぐっと言葉に詰まったトゥーランドにまた笑いが出そうになったのが、ファルナールが口元を押さえて奥に引っ込んだ。

なんとなく引っ込みがなくなつたトゥーランドは、落ち着か無げにその場に立ち尽くす。

暫くして帰ってきた彼女の手には、前トゥーランドが自身の主人から受け取った箱と同じものが。

無言でそれを受取るうとする彼に、ファルナールは一步引いた。途端に嫌そうな顔をする彼。眼鏡の奥のアイアンブルーの瞳が、

責めるように揺るぐ。

「いるの？いらなの？」

「・・・」

「どっち」

「・・・いただきます」

素直でよろしい、と彼女は笑った。

「貴女のことには気に食わない！」

「奇遇ね、私もよ」

威嚇するようなトウーランドの言葉に、彼女はさらに笑ったのだ

つ
た。

二度食べたい味なんです、何か。（後書き）

ファナにはだれも勝てません。

が、しかしトゥーランドの行動はすべてにおいて彼女にはツボのようです。

路地裏にはいつも面倒事が転がっている模様です（前書き）

毎度のことながらとろとろ更新です。感想・誤字脱字などありましたらお願いいたします。

今回はちよつと今までより長め&流血表現あります。苦手な方ご注意ください。

路地裏にはいつも面倒事が転がっている模様です

それから一か月。

早い。本当に早いものだ。

ドルトナンド家ではお嬢様を中心に何かが起ころうとしている。今までにない変革といったところか。

それを語り出すときりがないのでやめておくが、これから面倒なことになるのは必至だ。

ただ、それでもあの店の菓子が・・・その、癖になってしまったのは認めるしかない。

こんなにも忙しい、というのに、なんとか時間を見つけては通ってしまっている。

ドルトナンド本家でのあの事件は思い出したくない。お嬢様の目の前であの女と口論。

ばらされなかったのはいいものの、自分の甘党が知られればそれをネタにお嬢様に更なる逃亡を許してしまう気がする。甘いものを餌にいいように扱われてしまう気がする。だから切実にばれてほしくない。

・・・菓子は嫌いではないのだ。ただし彼女は自分としては否。そこは変わらない。

今日も店に行こうとその足を動かしている。トウーランドは薬草を買ってかえる帰りであった。

ドルトナンド家御用達のきまぐれ薬師は、国々の密林をめぐりあ
るき薬草を集めてくる。それが今日は王都にきているということ
で自分の顔合わせも兼ねて、トウーランド自ら出てきたのだ。

トウーランドは今日も少し不機嫌に、ただ滲みだす期待を隠し
き
れずに路地裏を歩いていた。

やはり変わらず汚い道。

来る度に自分が少し片づけているにも関わらず！と彼は顔を顰
め
た。

が、この界隈の店主たちが、なぜか定期的に荷物が丁寧に重ね
あ
げられることを不気味がつている事を知る由もない。

今日も今日とて道端に転がる木箱を拾い、別の木箱の上に重ねた。
こうして王都路地裏七不思議は今日も更新された。

ちなみに後の六個については不明である。

ぱん、と手についたほこりはたき、さあいくかと彼が顔を上げたとき。

がしゃん！

ガラス物の割れる音が響いた。

路地裏だ。

それは痴話喧嘩なり怪しい取り立てなりあるだろう。それには首を突っ込まないのが得策だ。

しかしなぜかその時は胸騒ぎがした。

だから彼は珍しく、その足を前に進めたのだ。

「
！
っ！」

誰かの言い争う声だ。声の種類からして男か。

「うる　　！あんた　　う！」

っ！

この声。

少し語尾が粘っこい特殊なしゃべり方。

なぜか視界が一気に真っ赤になった気がした。

はっはっ自分の呼吸音が急に大きくなる。

駆け足でいつもの道を進んでいくが、なぜか遠く感じる。焦っていたからか荷物に躓いたが、なんとか立て直して最後の角を曲がった。

そこにいたのは、やはり彼女だった。

いつものようにエプロンをつけたままで、腕を組んで店の前で仁王立ちしている。しかしいつもと違うのは、周りを二人の男たちに

囲まれていることだ。

店を守る様にして立つ彼女の瞳は燃えるように煌き、周りの男たちを威嚇している。

彼女の視線が、一瞬自分にとまり ほんの僅かに目を見開く。

しかし直ぐに彼女は視線をそらし、まるでトウーランドを見なかったかのように周りの男たちを見据えた。

思考が、とまった。

なぜです。

なぜ、わたしをみていながら。

わたしに。

まるでトウーランドは縫いつけられたかのようにそこから動けな

かった。先程動いた足は、嘘のように固まっていた。

思考することすらできず、ただ視線をうけることを期待するかのようには彼女を見つめていた。

自分でも訳がわからないまま。

そんな彼をほっておいたまま、事態は進んでいく。

彼女は真ん中の男を睨みつけ、声をあげる。

「だから、今は店の時間じゃないし、その仕事は受けない。帰って頂戴！」

「なにいつてんだよ！前の仕事の報酬弾んでやったろうが！」

「前は前よ！それにあの仕事なら妥当な報酬だったわ！」

「ナマいつてんじゃないやねえよ、調子のもつてんじゃないやねえ！ここで剥いてやってもいいんだぞっ黒猫っ！」

がっとなが彼女の腕をつかみ、体を引っ張り上げた。

彼女の細い体が、男に引き寄せられて―

自分がしっかりと覚えているのはそこまでだ。

彼女が自分を無視したことが。

男の言葉にか。

それとも、彼女が危険だったからか。

主以外には無関心だったはずなのに―

一瞬だけそう思ったが、すぐに脳内は怒りで染め上げられた。

ばさり、と薬草のはいつた袋が落ちた音を聞いたか聞かずかのうちには彼は駆け出した。

音を聞いて振り返った手前の男を無視して、彼女を掴んだままの男に向かっっていく。

右手を引き、勢いに任せて男の顔にぶち込んだ。

「ぶつ・・・く！」

拳の下で鼻の骨が折れる感触。

振り向きかけた男は彼女を掴んだままで利き手を使うことができず、もろに正面からトゥーランドの拳を受け止めることになった。ぐらりと傾いた男の腕から彼女が滑り落ちるのを素早く抱きかかえる。

あっけにとられていた手前の男が正気を取り戻し、拳を振り上げた。トゥーランドは右手でファルナルを抱えたまま、体を捻り男の拳を寸で避ける。

咳きこむファルナルから手を離し、ちっと舌打ちして再び拳を振り上げた男の腕をつかんだ。そのままぐるりと体を回転させ背負

い投げる。

「ぐ、うわっ！」

ずどん！とレンガ造の道に男は叩きつけられ、背骨が嫌な音をたてた。そのまま掴んだ手首を逆に捻りあげると、嫌な音とともに男が絶叫した。

腰にさした剣を抜かせないための処置だ、悪く思うな。

足元で男が手首を押えて声を上げ続ける。背骨に相当なダメージを負って転がることもかなわぬようだ。

そんな男の醜悪な姿を冷たく見据えて、トウーランドが立ち上がる。

と同時に背筋を駆け上がった悪寒に従って体を右に逸らした。その瞬間に頬を撫でるナイフ。

「・・・鼻を折っただけでは足りませんでしたか」

「てめえ・・・ふざけてんじゃねえぞ」

「ふざけているのはどっちですか。女性に対して」

トウーランドの言葉を聞いて、ぼたぼたと鼻から血を流す男がはっと笑った。

「お前、その女が何か分かって言ってるのか？騎士道精神ってやつならお呼びじゃねえよ。ただな・・・ここまでされて帰しはしねえけどなっ！..!」

言葉と同時に男はナイフを振り回す。

「っ！」

相手がナイフをもっているとしても、とトゥーランドは身を屈めた。

しかし迎撃態勢に入った彼に、向かおうとしていた男の動きが急に止まった。

「?!」

「っぐあ・・・?!」

茫然と自分の脇腹を見る男。

そこに刺さるのは男のそれよりも細い短剣。

はあはあと息を荒げるファルナルが、短剣を投げたままの姿勢でそこにいた。

トゥーランドはいたるところから血を流す男に、今度こそダウンの一撃をお見舞いした。

「この男たち、当分起きないでしょう。私が自衛団に引き渡しておきます」

トウーランドが男たちを縛る間、ファルナールはその場に気難しい顔のまま立っていた。

仕事を終えたトウーランドは、立ち上がり、振り向く。

その顔には抑えきれない怒気が籠っていた。

ファルナールでさえ、その眉をびくりと揺らし、その顔色をどことなく悪くするほどに。

「何をしているんです……」

「……」

「あんなのに囲まれて……。しかもなぜ私がいるのに気づいていないながら」

そこでトウーランドは言葉を飲み込んだ。

そのまま彼女の腕をぐい、と引っ張る。

「っつー!」

「やはり怪我をしているんですね、直ぐに手当てを」
「っ離しなさい!」

痛む腕だというのにそれを引っ張るファルナールの顔は、痛みから歪んでいた。

その顔を見た途端、トゥーランドの怒りが爆発した。

「虚勢をはってる場合ではないでしょうが!」

「っ?」

「貴女女性です!自分の身を大切になさい!」

言い返そうとしてか彼女は口を開いた。

しかしはっとしたように眼を見開くと、やや茫然としていたが、僅かに苦笑を零した。

「・・・全く」

「なんですか」

「なんでもないわ、・・・なんでも」

「・・・とにかく治療しましょう、すぐに」
「分かってるわ。逃げたりしないからこの手、話してもらえる？」

いつもの間延びした口調でなく、彼女は微苦笑していた。

路地裏にはいつも面倒事が転がっている模様です（後書き）

ありがとうございました！

本編がさくさく進まない今日この頃。

こちらの話、大丈夫でしょうか。時系列的には本編超えちゃったよ。あとこれはファンタジーじゃないなーとか思ったので今更ジャンル変更いたしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3965u/>

甘党執事と紅の美女

2011年8月15日06時43分発行